

支部見聞録 (九州支部)

From 大分



別府八湯は別府・浜脇・観海寺・堀田・明礬(みょうばん)・鉄輪・柴石・亀川温泉から成り、別府市街の至る所から湯煙が上がる

「おんせん県 おおいた」が誇る 温泉の底力



▲別府八湯には砂湯や泥湯、打たせ湯など多種類の温泉がある。写真の「棚湯」のような展望の露天風呂も



観光キャッチフレーズに「おんせん県おおいた」を掲げる大分県。県土の広さは全国22番目にもかかわらず、湧出量は北海道を抜いて日本一、源泉数も2位の鹿児島島の2,769孔を大きく引き離して4,411孔と群を抜いての日本一。「すごさは量だけでない」と、大分し(大分県人)が胸を張る、その魅力とは——。おんせん県おおいたの底力に迫ろう。

世界に誇る湯量と泉質数

露天の岩風呂で、タイル貼りの共同湯で、砂蒸し温泉や打たせ湯で——。温泉でシンクロナイズドスイミングの妙技が繰り広げられる大分県観光プロモーション映像「シンフロ」が昨年話題となった。登場する温泉は、種類や環境も様々なら、湯の色も透明や白濁色、緑褐色、灰色と色とりどりで、泉質は実に多彩だ。大分県の地下はいくつもの地層がぶつかり合い、複雑な構造を作り出している。そのため数多くの火山があり、水源となる水脈も潤沢で、豊富な種類の泉質が生み出されている。

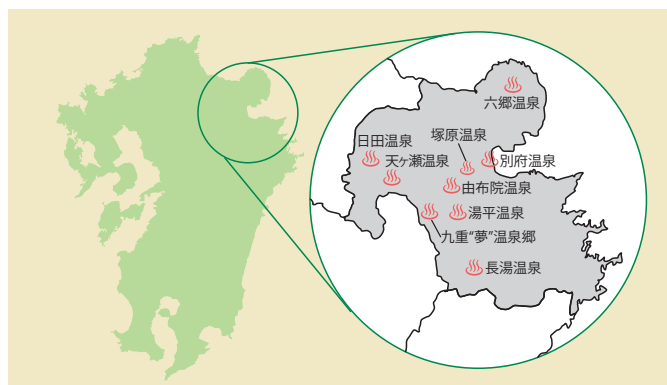
特に八つの温泉(別府八湯)を擁し、一地域の温泉湧出量日本一を誇る別府一帯は、泉質数世界一。「温泉表示される11種類のうち、放射能泉以外はすべてあります」と、大分県東京事務所のおんせん県おおいた課主幹、直山たかしさんはいう。『風土記』に記され、江戸時代には温泉番付の常連。明治に港が開かれて発展を遂げた別府は、「泉都」とも称される存在だ。

大分県の温泉観光は、昭和40年代頃までは桁違いの温泉資源に恵まれた別府が、それ以降は別府と由布院の2極がけん引してきた。興味深いのは、この二つの温泉地が全く異なる志向と性格を持っていることだ。「別府は昔からアイデアマンを輩出

する土地柄で、いろいろな人がユニークな手を打って盛り上げてきました。一方、由布院は哲学を持って長期的視野に立ち、イメージをつくってきた温泉地です」。

温泉エンターテインメント別府 vs 欧州型リゾート由布院

明治末から昭和初頭にかけて、別府では油屋熊八というアイデアマンが活躍し、旅館経営や別府観光、PRに新機軸を開いている。昭和30～40年代に未曾有のにぎわいを謳歌した後、別府は団体旅行から個人旅行への潮流の変化に乗り遅れ、歓楽色が嫌われて危機的状况に陥ったが、「アイデアマンたちが自然発生的に動き始め、1990年代には多彩な取り組みが行われました」と直山さん。見どころを地元ボランティアガイドが案内する「別府八湯ウォーク」や、入湯数で段位が上がり、88湯を制覇すると名人位が授与されるスタンプラリー「別府八



▲大分県のおもだった温泉。このほかにも多数ある



▲由布院の湯の坪街道には、風情ある店が軒を連ねる
▶広々とした絶景の露天風呂は由布院ならではの



◀▲長湯温泉は炭酸泉で、肌に気泡が付く立ち寄り湯「ラムネ温泉館」は藤森照信氏設計



◀▲別府の名物・地獄料理は、高温で吹き出す温泉の噴気で食材を蒸し上げる

湯温泉道」、まちの名人や達人が講座やイベントを一斉に実施する、体験型観光の博覧会「別府八湯温泉泊覧会」(オンパク)、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」などが再び別府を盛り立てた。中でもオンパクは観光資源の掘り起こし手法として一大ムーブメントとなり、多くの観光地に波及している。「別府でのオンパクはここ2年ほど休止していますが、別府のあちこちで次のアイデアが温められていると思いますよ」。

一方、由布院の若手リーダーたちが、別府とは違う「ヨーロッパ型の保養地を目指すべきだ」と動き始めたのは1970年代のこと。歓楽色を排し、「田舎を売ろう」と高い建物を造らない申し合わせをし、大型開発に抵抗。まちぐるみで映画祭や音楽祭など手作りのイベントや情報発信を次々に行い、イベントに招いた文化人たちに若手リーダーたちが熱く夢を語ることで支援者を増やし、イメージを形づくっていったという。利害が対立しがちな観光業と農業も由布院では早くから協力関係にあり、地産地消がいわれるはるか昔から地元の食材を使ってきた。普通ならライバル関係の宿の料理人たちが料理研究会を組織。味の向上に余念がない。こうした息の長い取り組みが、今や「行ってみたい温泉地ナンバーワン」の座を不動のものにしている。

性格の異なる二大温泉地のパワーに加え、ほかの温泉も個性派ぞろいだ。世界屈指の炭酸泉を誇り、現代版湯治を推進する長湯温泉、日本一の歩行者専用橋、九重「夢」大吊橋を擁し、山間に温泉地が点在する九重「夢」温泉郷、石畳の温泉街が風情豊かな湯平温泉、『豊後国風土記』にも登場する天ヶ瀬温泉、西日本一酸性度が高い塚原温泉など、枚挙にいとまがない。

外に開かれた気質が育む未来

日本の観光の未来を担うインバウンドに関しては、別府でトップクラスのホテルが30年ほど前から韓国客の誘致を行うなど、動きは早かった。そのため大分では韓国からの旅行者が多く、次いで香港、台湾、最近では中国やタイも増えている。2011年には埠頭が整備され、大型クルーズ船の接岸が可能になった。現在は個人旅行客も伸び、富裕層の姿が目につく。以前は、言葉や習慣の違いへの危惧もあって受け入れをためらう宿が多かったが、「県でもおもてなしのセミナーや銀聯カードの説明会や、無料Wi-Fi環境の整備支援などを行って、意識も変わってきました」と、直山さん。外国人客に触れる機会を重ねて宿も慣れ、自信を深めているという。

インバウンドを考える上で、大分県には大きなアドバンテージがある。それは大分県・別府市が誘致して2000年に開学した立命館アジア太平洋大学(APU)の存在だ。約6,000名の学生のうち約半数はアジアを中心とした留学生で、人口当たりの留学生数は別府市が全国一、県としても全国2位。住民は異文化との接触に慣れ、留学生が飲食店や観光業でアルバイトをしているので、日常的に外国語対応できる施設が多い。留学生から出身国の人々へ、おんせん県おおいたのイメージ波及も期待される。

「大分には、よそ者を温かく受け入れる風土がある」とは、よく言われる言葉だという。油屋熊八も大分出身ではない。別府・由布院をはじめ県内各地で県外からの移住者が新しい風を吹き込んでいる。彼らが存分に腕を振るえたのもそんな風土と無縁ではないのかもしれない。温泉だけでなく、移住者も留学生も旅行者も湯気してくるむように受け入れる気質もまた、おんせん県おおいたの明日を築く貴重な資源なのだ。



▲別府の「鬼石坊主地獄」。熱泥が噴き出る様子が坊主頭に似ている
◀別府八湯の別府温泉を代表する共同湯「竹瓦温泉」の湯船
▶別府八湯・明礬温泉では、全国でも珍しい泥湯が楽しめる



◀別府温泉の温泉施設「ひょうたん温泉」のシンボル「瀧湯」
▼「血の池地獄」など八つの地獄から成る「地獄めぐり」が有名



▲明礬温泉では、湯の花を採取する藁葺き小屋を見ることができる

別冊 FROMはウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください!
<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>



別府の名物「地獄蒸し料理」についてご紹介。